

民俗博物館だより

Vol. VI No. 3

1979. 12. 5



弓射神事(田原本町北阪手)

目次

地域博物館における情報コーナーの役割 (地域博物館を考える)	1
続・家財道具の変遷(物質文化)	3
仏名会(大和の民俗行事)	5
予祝儀礼としての年占と結鎖祭 ～農村にみる古いと呪いをめぐる素描～(フィールドノート)	7
ザル製作技術～竹材からザルづくりまで～ (民俗資料調査抄報)	10
大和のオコナイ(民俗資料調査抄報)	11
おしらせ・他	11

地域博物館における 情報コーナーの役割

小川直之

情報コーナー

ここでいう情報コーナーというのは、館内に設けられた情報サービスを行う一区画のことである。従来、この種のコーナーでのサービスは、学芸員・解説員などの館員によるもの、印刷物や情報パネル、映像によるものなどで行われて来たように思う。具体的にはあげないが、実際にはこれらが単独で、あるいはいくつかが組み合わせられて行われている。

これを博物館の利用者の立場から整理してみると、次の2つのタイプに分けられる。①利用者が質問を用意して、それに館員が答える形式註1。この場合は、サービスする情報の内容はその場その場で弾力的なものになるが、あくまでも利用者は得たい情報・質問を明らかにしてなくてはならない。Aという事柄について知りたい、Bという事柄を調べるにはどうしたらよいかなど利用者は情報コーナー利用の目的を持っていることが要求される。さらに、この場合はここに館員の配属が必要となる。②印刷物・情報パネル・映像等によって用意された情報の中から利用者の意志によって自由に必要な情報が得られる形式註2。この場合は、用意された情報には限りがあり、利用者の要求とは必ずしも一致しない。しかし、質問内容や得たい情報は何かを明らかにしなくても、あるいはこれがなくても利用できる。①と対応させていえば無目的でも利用できるということになる。展示を見てきた延長で、そこに用意された情報のユニットを選択して楽しむことが可能である。

①を問いあわせタイプ、②を利用者選択タイプと呼べるが、①は利用者が常に主体的に働きかけるのに対し、②は必ずしもその必要がなく、単に方法上の違いにとどまらず、その質までも異なっているといえよう。ここでは方法上の問題には立ち入らないが、当然ながら両者が相互補完的にあるのが望ましいといえよう。

展示と情報コーナー

このような情報コーナーは入館者の利用空

間に設けられ、室として独立していたり、展示の順路の一角に設けられているが、ここでは展示との関連で情報コーナーの役割について述べてみたい。

本誌VOL. I、No.1で芳井敬郎氏註3が「展示ではその限界といえようが、ものを視覚にうたえて理解させるまでであるが、この場（オートスライド）で、反復によって理解をより完全なものとする」、また同じくVOL. III No. 1で大宮守人氏註4が「もとより展示という手段には利点と共に限界があるので、それを補うため様々な手段が必要である」と述べているように展示には限界があるといえよう。

展示がテーマ、ストーリーを持って構成されるのは当然のことであり、展示が学芸員の調査研究の発表の場であるということも共通の理解になりつつあると思う。しかし、テーマ、ストーリーが強調され、学芸員の調査研究の発表の場という色彩を強めれば強めるほど、展示は資料のもつ情報の一面をクローズアップしたものになるのでなかろうか。私の勤務する館に「相模の民具」というコーナーがあり、ここで相模川上流から下流各地の鍬を展示し、地形によって柄と刃の角度や柄の長さ、刃の形が違うことを示している（小島弘義氏の企画）が、ここでは鍬の種類や農具体系の中での鍬の位置付け、使用法等については一切触れていない。それはここで鍬についての情報を全て展示しようとするれば今の何倍もの展示スペースが必要となるし、他の展示も同様にすれば限りない展示室がなければならない。多元的な展示（いろいろな視点を同時に一カ所に出した展示）では、展示の効果が期待できない。限られたスペースで、展示効果をあげるには、資料のもつ全ての面を表現するのではなく、限られた側面を必要性（テーマやストーリー）によって選択して展示すべきだと考えたからである。

展示の限界は、上述した展示そのものが内在している一面性という問題だけでなく、他にもあろうが、ここでこれを補う必要性がで

てくる。最近各館で盛んな体験学習も、展示では読みとれない側面を体験を通じて学習していこうという役割を持っていると考えられるし、ここでとりあげている情報コーナーの役割も、展示の内容をさらに深めたり、展示とは違った視点、展示していないテーマや展示ではうまく表わせないテーマなどについて学習する場で、展示の内容をさらに巾広いものにする役割をもっているといえる。

地域博物館

地域博物館の性格や考え方について、一定のレベルに達しているとはいいがたいが、これを性格付ける一要素として、地域のもつ文化や自然の再認識あるいは再評価を行っていくということがあろう。これは地域のもつ特質や問題を見極め、館の諸活動の中で取り扱い、展開させることともいえ、ある地域を設定するのは調査研究等の活動の範囲を限定するものでなく、自然や文化の特質、問題点を見極める時にかかわってくる地域である。そして、ここで設定されたそれぞれの課題（特質・問題点）は学芸員個人の問題意識に沿って調査研究、展示などに展開するといった、学芸員個人に帰趨するものでなく、館全体としての課題に止揚されるべきであろう。

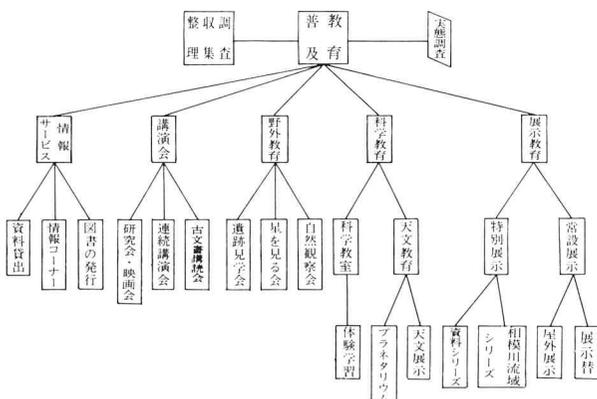
また、一方地域住民の博物館利用の点からいえば、地域博物館は観光地的利用に終るのでなく、日常的な博物館利用を旨とするものである。そのためには展示を含めた教育普及活

動全体の構成で「地域住民の日常的な博物館利用を保障していく」ことが必須となってくる。体験学習・観察会・見学会等定例的な教育普及活動は、こうした日常の利用を保障する一つの場であるとも性格付けられるし、情報コーナーもこうした場の一つとしての役割をもつものである。何度も見た展示を、情報コーナーを介して巾広く見なおそうというには魅力ある楽しい場でなくてはならないが、博物館そのものの情報（館の概要とか仕事の内容、特別展や催物の様子、他館の案内など）をここに揃えることによって、日常気軽に利用できる場で、地域住民と博物館そのものを結ぶ接点にもなり得ることと思う。

- 註1) 例えば秋田県博のサービスコーナー、ここでは館の刊行物等も並べられ、自由に見られるようになっていた。
 (2) 例えば平塚市博の情報コーナー（情報パネルによる）、国立民族学博のビデオテーク（VTRによる）など。
 (3) 「奈良県立民俗博物館の展示」
 (4) 「教育普及活動を振り返って」
 (5) 後藤和民「郷土博物館」（『博物館学講座4、博物館と地域社会』雄山閣 昭和54年）、伊藤寿朗「博物館と地域—地域博物館観の成立をめぐる—」（『平塚市博物館年報第3号』平塚市博物館 昭和54年）、などにみられる地域博物館論。
 (6) 浜口哲一、小島弘義「地域博物館における学芸員と特別展」（『博物館学雑誌』第2巻1・2号 全日本博物館学会 昭和52年）

（平塚市立博物館 学芸員）

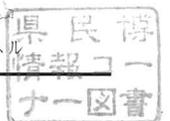
平塚市博物館教育普及活動プラン（年報第1号より作成）



▲情報コーナー



▲相模川流域の稲作技術「摘田」のパネル



続・家財道具の変遷

芳井 敬 郎

前回^{註1}にひきついで大正初期から昭和初期にわたる家財道具に関して一老人^{註2}の伝承より記述することにする。

まず前回の「高いされた品種」の一覧表に記載した個々の道具についての使用状態などについて順次述べていく。

料紙文庫は色紙を入れるもの。紙文庫は半紙・杉原紙入れである。糠箱は洗顔用の糠袋を入れるものである。御殿衣桁は部屋の隅にたてる隅衣桁とちがい、黒い真塗の鳥居状の大型のもので定紋が入っている。これは組み立て式であるため、婚礼の荷運びの際は黒塗の被せ蓋の長い箱に収納した。

枕には、下駄枕、舟底枕、床几枕、坊主枕があった。下駄枕は、底に歯のついた下駄型のものである。これは大正初期に大阪で作り出し一時期流行した。そこでこれを「ナニワマクラ」とも呼び、25銭ほどで販売した。上面にベツチンのきれでできた小枕がついている。舟底枕は下駄枕より上等であり、底が湾曲した舟底になっている。これは主に女性用である。これに引き出しのついたものもある。坊主枕とは円筒状の、きれまたは皮製のもので、皮製が上等となっていた。主に男性用である。

産湯盥は出産後の初湯に使用する。真塗の桶で上物には蒔絵をほどこしたものがある。これに湯注ぎの湯桶^{ゆづき}をつける。湯桶は周知の茶懐石に用いられるものと同型である。その注口には鞘をつける。

下駄箱は前面がケンドン蓋になっていて、六足の下駄、雪駄などを入れる。下駄網は網袋であり、そこに高下駄などを入れ嫁入に持参した。

間簞笥は名のごとく1間幅のもので、その幅に仕上げる「三つ寄せの間簞笥」がある。これは3種の簞笥を合わせたものであり、和歌山地方で多く用いられた。また中ほどに衣装盆の入れた戸袋付きの中衣装簞笥がある。これは大阪型の簞笥である。帳簞笥は書類入れである。これは婿養子にいく際持参する。

③簞笥の製作

主に自家では簞笥を製作し、その他は他から仕入れることが多かった。枕は大阪市内南区松屋町・東区常盤町、柳行李は兵庫県豊岡、鏡台・針刺・衣桁、茶袱台は大阪市西区南堀江通り、重箱などは和歌山県海南地方から仕入れた。

そこで大阪の間屋へ頻繁に行った。銘仙の着物をつけ汽車を使って大阪湊町駅に降り、そこから各店まで人力車に乗った。店では大和がかりの番頭が相手をした。番頭は縞の着物に角帯を結び、前掛（前垂）をつけていた。多く注文すると人力車で駅まで送ってくれた。品物は俵巻きにして間屋の表に積む。それを夕方四時半頃に1本かじの荷車で運送屋が湊町駅まで運び、次に貨車で最寄りの駅まで送られる。そこで下され駅から店まで運送屋が運搬してきた。

また、客の間屋まで連れて品定めをすることもあった。これは茶道具の場合が多かった。その際は大阪の唐物町へ行った。

簞笥の材料（金具・木材など）も大阪の各専門店で仕入れた。

④簞笥の製作

製作には職人があつた。職人は専従と、渡りのものがいた。渡りのもは、和歌山や大阪の和泉からやってきた。前者は黒丹貼り、後者は桐簞笥を得意とした。

職人を1人前にするのは普通尋常小学校を終了する数え年の13才ぐらいから兵役検査の21才までの間でおこなった。最初はいえの風呂たきなどの小間使いからさせ、板挽き、ソックイ（ノリ）練り、板削りなどを順次仕込んでいった。板挽きは6尺程の木に墨をして木取り台の上で縦挽き鋸でひいた。板削りには「荒カンナ」「中シコ」「仕上げ」の三工程があった。

月のうち1日、15日は休みで、見習いの間は盆と正月に里へ帰った。その間は「シキセ」といわれる着物、下駄、小使いがもらえた。年期を務めると道具一式、絹の着物とお金をもらった。

注 1 「家財道具の変遷」(『民俗博物館だより』Vol. VI No.1)

注 2 檀原市八木町高木きぬえ氏(明治34年生)ー長くタンス屋を営む。

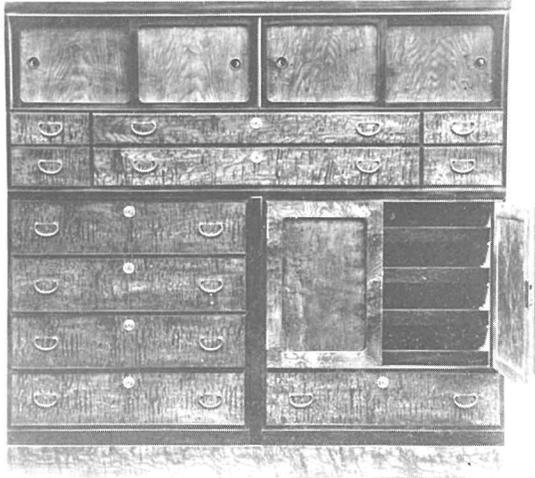


写真1 三つ寄せの間簞筒

3種を組み合わせる。一間幅。和歌山地方で多く用いる。

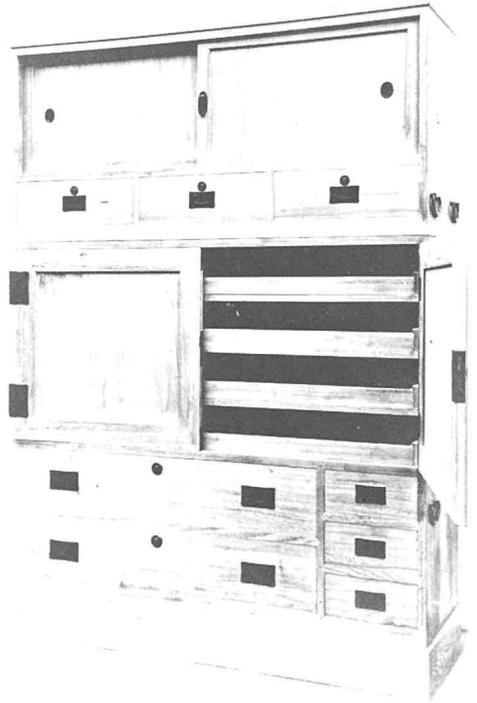


写真2 中衣裳簞筒

なかほどに、戸扉がつき、その上に、小引き出しのついた大阪型の簞筒。



写真3 簞筒製作の仕事場

向って、右手前ーソックイ(ノリ)練り。右ーケズリ台の上で簞筒の後板や底板など大物を削る。左ーアテ板の上で戸袋の框や前板など、小物を削り仕上げる。

※いずれも高木茂男氏(檀原市八木町) 所蔵写真

仏名会

浦西 勉

奈良県の年の暮の二大行事は、春日若宮のおん祭と、長谷寺の仏名会であろう。長谷寺の仏名会は今日、1月8日から10日に行なわれているが、かつては舊暦12月8日から10日であった。おん祭は県北部の地方で、仏名会は県南部の地方でその日をめやすとして、農作業を終える日としている。村々ではこれらの行事の日を年の暮のけじめとしているようである。

さて仏名会というのは『仏名経』という經典によっている。この経によれば、三世（過去、現在、未来）の諸仏の名を誦読すれば、現世安隠で、また諸難からのがれ、諸の罪を消滅し、来世に成仏をするというのである。身を浄くして仏の名を唱え、その罪を減じて成仏することができるという。特に十二月に行うのは一年間の犯した諸罪を減じ、来る年に清らかな身をもつことを祈念したのである。

この仏名会は日本では古くから行なわれていた法会の一つで、その始りは宮中にて行なわれた。『続日本後記』には承和五(838)年「十二月乙亥、天皇於_二清涼殿_一修_二仏名懺悔_一限_以_二三日三夜_一律師静安、大法師願安・実敏・願定・道昌等通_二道師_一内裏仏名懺悔自_レ比而始」とありこの「仏名懺悔」が仏名会のことである。このことは『三宝絵詞』において「佛名は、律師静安が、承和のはじめの年、深草の御門をすゝめたてまつりて、はじめ行はせ給ふ。後にやうやくあめのしたにあまねく勅を下て、行なはしむ。」とある。この静安律師は、仏名経を書き写し、また一萬三千仏を写して、公家に進上しようとしたが、なかばにしてたおれ、弟子達が先師の意をついで、三千仏を七十二鋪を写して、公家やその他の国々へ分配したと記している。そして「もしこの三世三劫の諸佛の名をききて、或はよくかきうつし、或は佛の形をかき、或は香華伎楽を供養して、心をいたして禮拜したてまつらば、その功德無量なり。」とある。時代が下るが、『塵添_二壇囊鈔_一』にも「承和五年ニ

佛名アリ。静安法師有_二比良ノ山_一。佛名經ヲ讀ミ禮拜懺悔ス聲ヘ帝闕ニ聞ヘケル間。剩シテ聲ニ付テ是ヲ被_レ尋果シテ安公ヲ得タリ。

導師トシテ被_レ修_二佛名懺悔_一。」とあり少し伝説化しているが、おそらく宮中を中心として十二月に仏名会あるいは仏名懺悔と称して恒例化したのであろう。その年の罪けがれを消滅することを祈念することが行なわれたのであろう。それが地方の寺院へ広がっていったと思う。

ところで、宮中で行なわれている仏名会に地獄絵の屏風が立てられていることが記されている。『公事根源』では「佛名会」に「佛前ニ香花ナドヲソナフ、ヒサシニ地獄變ノ御屏風ナドヲ立ツ」や『栄華物語』には「しはすの十九日になりぬれば御仏名とて地獄系の御屏風などとうで、しつらう」や『枕草子』にも「御仏名のまたの日、地獄絵の屏風とりわたして、宮に御覧ぜさせ奉らせ給ふ。ゆゆしういみじきことかぎりなし」とある。この地獄絵の屏風が仏名会にどうして必要なのであろうか。それはどうしても仏名会に一年間の罪けがれをとりのぞくのだという説明に必要であったからではないだろうか。つまり十分に仏名会の懺悔の意味がわからなかった人々がおり、それらの人々に地獄絵の屏風を示して、罪けがれの持つものは、地獄絵で示すような世界へ落ちるのだと説いたのではないだろうかと思う。清原貞雄氏が「仏教は我が固有信仰たる神道と根本的に違った要素を有って居る。神道には無かった所の未来世の思想を有って居る事、神道信仰では夢にも知らなかった因果応報の説がある事^{註①}」と記されている。清原氏は「未来世」や「因果應報」などは、日本には本来なかった考え方で、仏教によってその考え方が生じたのであるという。だとすれば、本来日本の習慣として、年の暮に一年間の罪けがれを懺悔するということがなかったのであろうか。仏名会の行事は『仏名経』に説くところの「懺悔滅罪の為に諸仏の名号を受持すべき」という思想の影響を全

面的にうけているのであろうか。また三世(過去、現在、未来)の存在と因果応報などの考えを合わせて日本に定着していったのであろう。

さてこの行事は単に宮中のみでなくあちこちで行なわれていたようである。『塵添壇裏鈔』には「佛名懺悔^{註1} 禁中^{註2} 始テ邊山ニ至テ、佛名懺悔トテ、歳暮ニ必ズ過現末ノ三千佛ノ御名ヲ称シテ、罪障ヲ懺悔スル也」とあり各地で行なわれるようになった。奈良県でも、法華寺、大安寺、壺坂寺、興福寺、長谷寺、久米寺、などで行なわれていた。次の記録などによってその事が知ることができる。大安寺の場合は『大安寺年中行事次第法式』(文安5年〔1448〕)に「(十二月)廿一日佛名會、自今日至廿三日三箇夜修之、奉出御舍利菓子花餅等備え」とあり仏名会の行なわれていたことがわかる。また興福寺では『興福寺年中行事』(永仁六年〔1298〕)によると「(十二月)廿三日 佛名懺悔事」と記録されている。奈良県下の場合、なんといっても長谷寺の仏名会が一番親しまれている。長谷寺の仏名会は、本尊の十一面觀世音の宝前に過去、現在、未来の三千仏の御影を掛けて、毎日千遍の仏名経を讀誦するのが決りである。そして一年間に犯した罪けがれの消滅を祈念するのである。その法要中の特に9日は県内のみならず、伊賀や河内などからも人々が群参したという。群参したのは一つはやはり一年間の罪けがれを消滅するためであって、菟田野町では仏名会に参るとブトやカを殺した供養になるとか言うことなどから理解できる。またもう一つは、この日長谷寺門前に歳末の市が出るのである。近郷近在から正月用の買物に出向いてくるのであった。また特に人の目を引いたのは明治の中頃まで、男は禪で女は白い腰巻で本堂の周囲をお百度を踏んだ「裸まいり」があったそうである。「長谷の佛名・裸でまいる」などと唱えられたとも言う。香芝町の例であるが、長谷寺に願かけした者が、ガンハタシと言ひ、男は裸参り、女はさらし参りをしたという伝承がある。

はじめにこの長谷寺の仏名会のころ、各村々では農作業を終えるめやすとしたと書いたが、また、このころから正月準備を始めているようである。たとえば、香芝町では餅つき

用のトリ粉をこの日にはたいたという。またその粉で団子をつくったと言う。この団子を「長谷寺のブツブツダンゴ」と言っている。この長谷寺の仏名会に米の粉の団子を作るところが多いようである。たとえば、仏名会の日に家々ではカブラの味噌汁にヒトツ団子を入れ先租に供える、(室生村小原)ところや、トキビの粉で仏名会団子を作った(室生村深野)ところなどがある。また庭に干しておいてこぼれおちた米を集めて粉にして団子をつくってミソ汁に入れて食べるところもある(菟田野町大神)。このように長谷寺の仏名会の頃になると、村々では粉をはいたり、団子を作ったり、長谷寺へ参詣もしたようである。

また『大和国高取領風俗問状答』の中に仏名会に所々の観音へ参詣すると記されている。これをみると村々でも仏名会の日に行事が行なわれていたとも思われる。それは村落の寺院に仏名会の行事に使われる「三千仏」の掛軸が保管されているところがあり、やはり仏名会が行なわれていたのであろう。たとえば高取町越智の閑住院の寺宝として三千仏の軸があり裏面に「天保三年十一月寄附、住持春隆代、施主友三郎母外四十名寄附」とあり、村人が三千仏を作り、それによって行事を行ったのであろう。また大宇陀町西山の光明寺では、十夜の日、三千仏の軸を掛けていた。これなどかつては、仏名会の日には掛けられたものであろうと思う。

註①清原貞雄『神道史』(昭7)

②『大和文化研究』14-4

③『大和文化研究』13-1

補註 文中引用した史料は本誌枚数の関係上割愛することを了承いただきたい。



▲長谷寺



予祝儀礼としての年占と結鎮祭

奥野義雄

～農村にみる占いと呪いをめぐる素描～

はじめに

五穀豊穡を願う予祝儀礼は正月前後に行なう行事である。年占いやオコナイや弓射ち、そしてオンダ（御田植祭）などは予祝儀礼の事例であるが、とりわけ弓射ちあるいは結鎮祭（華鎮祭）と称される儀式に奏上される祭文や秋祭りに奏上される祭文について検討し、その特色を素描したいが、まず、ここでは年占いと弓射ちから予祝にみる占いと呪いを窺うことから始めたい。

なぜなら、農耕における予祝儀礼に内在する〈占い〉と〈呪い〉は表裏一体の内容をもつものではないかと考えたからである。

これは、小稿で素描を試みる〈祭文〉においても窺えるのではないかと推察するところである。

したがって、まず「年占い」と「弓射」の事例から紹介していくことにしたい。

I、年占いと弓射ち・結鎮祭

五穀豊穡を願う予祝儀礼は正月前後に行なわれる行事である。オコナイや弓射ちやオンダ（御田植祭）などは予祝儀礼の事例であるが、年占いも正月行事の吉凶の占いで、周知のとおり年占は1年間の吉凶の占いで、農作物の作柄を占い、この作柄と密接な関係にある天候を占うものがある。この年占は時期的に小正月に集中し、年越（節分）、盆、十五夜などにも行なわれてきた。

この年占の方法にも種々多様であるが、大きく分けて粥占と豆占とがあることにきずく。

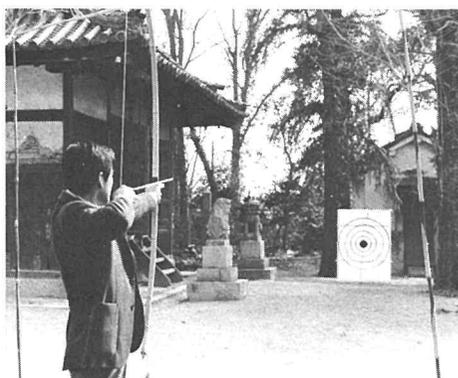
たとえば、奈良市押熊地区でみられる豆占が年越に行なわれる。すなわち、年越の晩に豆を煎り、これに黒塗りのお盆の蓋をしておいて、しばらくしてから蓋をあける。この蓋の裏に豆からの湯気がたっぷりつき、水滴が垂れるほどになると、「今年はたくさん水気があるな〜」と喜んだ。水気があることで、今年の雨量が充分であることと、これに伴う農作物の豊作・不作を占う結果を導いたのであった。この豆占も押熊では、年越を期に一年の豊凶を占う重要な機会であり、一年間の村の生活のリズムをととのえる契機でもあったといえよう。この豆占には、この水気の多少によって年占いを行なう他に、豆の焼けぐあいによって一年の天候を占う方法や豆を煎る折りにヒイラギの葉や豆を1月、2月、3月、4月と数えながら火にくべて、その燃え方によって一年の各月の天候を占う方法などがあつた。この豆占は各家庭で行なわれていた年越の行事であつた。

一方、各家庭（氏子）に年占の結果を発表し、その年の天候や農作物の豊凶を知らせる粥占という方法がある。天理市の大和神社や大和郡山市の矢田坐久志玉比古神社、そして奈良市の登弥神社などでは、年越に粥占神事が行なわれる。大和神社では2月3日、登弥神社と矢田坐久志玉比古神社では2月1日に粥占が行なわれる。

筒粥の年占が行なわれる矢田坐久志玉比古神社では早朝からアズキ3合と米1升を釜に



▲筒粥神事（矢田坐久志玉比古神社）



▲弓射ち神事（田原本町北阪手）

入れて神事の準備をし、祝詞奏上後、雨量を占う12本の竹筒と農作物の豊凶を占う10余本の竹筒を鎖編みにして丸めて釜に入れ点火する。釜の粥が煮えたり、アズキ粥の中に入れられた30本前後の竹筒に粥が入り込むころ合いをみて取り出す。釜から取り出した竹筒を三方に置き神前に奉つる。その後、社務所で竹筒を割り筒中を調べる。それぞれの竹筒には、毎月の雨量や農作物の品種が決められていて、アズキ粥の量の多少や竹筒のアズキ粥の溜った位置（場所）によって各月の雨量が占うのである。たとえば、筒の中身に溜ったアズキ粥が筒の丈の下方にあればその月の下旬に雨に恵まれるといい、粥占の結果は刷り物にして氏子に配られる。これが矢田坐久志玉比古神社の粥占神事で、「筒粥水溜祭」と呼んでいる年占である。このような粥占は大和＝奈良県だけでなく、大阪府（東大阪市の枚岡神社）や埼玉県（山田村の藤宮神社）など各地域で行なわれている行事である。

このように大雑把ではあるが、大和各地の年占の二様相をみてきたが、年越（節分）における大豆による年占が各地域の家を中心としたものであり、アズキ粥（または粥）による年占が各神社を中心としたものであることがわかり、明らかに予祝儀礼として受け継がれてきた形態・内容かつ伝播の差異を容認しないわけにはいかない。ただ、この二形態とも大豆・小豆といった穀物（豆類）を年占の媒体として用いる点が共通することにきづく。大豆は年越において、鬼、を退散せしめる力を有するという一種の悪魔払いの観念をもっている。一方、小豆は農耕儀礼のみならず人生儀礼の折々に、祝事、を標示する代用品としての観念をもつ。

いま、鬼、（悪魔払い）退散を意味する点を抽出するなら、予祝儀礼としての弓射神事（結鎮祭）とも共通する基盤をもつ。しかし、この弓射神事には一種の呪いの要素がある。たとえば、田原本町北坂手の弓射ちでは、神事の前に神主がノリトを奏上するが、このノリト（結鎮祭文）には五穀豊稔祈願とこの願いをこめた呪句が散見することが窺えるのである。すなわち、

凡ッ奉返諸神本宮ニ咒日

五方上下散供 神王皆 解脱皆得安即得本
座急々如律令 先玉女ノ方ニムカツテ天ヲ
三度見テ弓ニ箭ヲハケヨ
(中 略)

次ニ西方ニ射咒日 呪阿婁薩刃ソハカ
毗留薄刃天王助我與力除去邪悪急々如律
令

（下略）という文句がそれで、東西南北へ弓を射ることと呪文「急々如律令」とが一体となり一種の呪句を呈しているのであった（傍点一奥野、詳細は「祭文にみる唸唸如律令について」〔『古代研究』才18号所収〕において阪手と鹿路の結鎮祭文について触れ、古代中世の祭文について検討したので参照されたい）。

このように予祝儀礼としての年占と弓射ちなどの神事には、時期的には把握していないが、占いと呪いと要素が表裏一体になり、農村に浸透していった一つの例証になるのではないかと考える。

この点は、次にみる祭文、とりわけ農村落内部における農耕儀礼の一つとして行なわれてきた神事に使用されてきた祭文のいくつかにも占いと呪いの要素が存在したものと思われる。この点を含め祭文について検討しよう。

II、農村にのこる諸祭文

すでに、結鎮祭あるいは弓射ちとして周知の神事については別稿で述べたので、あらためて詳しく述べることを避けるが、田原本町北阪手の華鎮祭（旧正月20日）も桜井市鹿路の網掛祭（結鎮祭）（旧正月4日）にみる「祭文」には、いずれも五穀豊稔を願う記述がみられる。すなわち、「千秋万歳ノ壽福與タマフ田畠耕作五穀成就万葉豊饒ノ所聖數十人ノ結衆ホニ授タマフ子々孫々門々家々安隠太平ニ守タマヘリ在地近邊國土郡内普擁護シタマヘ」（北阪手）と、あるいは「今年頭明年頭一結之諸衆通俗男女貴賤上下皆長命可成昔修達長者跡續悪人呪胆怖畏急難火防火難水難口舌諍論等一切諸難他方世界拂也大施主耕作風雨須時五穀成就萬民豊饒牛馬六畜一粒萬倍祝穴賢々々」（鹿路）とあり（傍点一奥野）、五穀豊稔祈願がそこに存在していたのである。この正月に行なわれる神事＝弓射ち（結鎮祭）にみる祭文だけでなく、秋祭りにおける祭文にも五穀豊稔の願いが込められていたこと

にきづくであろう。すなわち、桜井市外山^{とび}の宗像神社の宮座（大頭屋と古頭屋）にかかる秋祭りの宮送りの神事に奏上される祭文がそれである。この神事は旧九月十九日に行なわれる行事であるが、行事内容については『和州祭禮記』に詳し（記述されているので、それに譲ることにしたい。ただ、ここで挙げる祭文は「天和二^戊曆九月十九日」の銘をもつもので、御分靈奉斎箱に納められている。

この祭文を繙くと、「再拜々々謹ミ敬テ白ス」云々という記述から始まり、「無上靈寶神道加持内外玉籙清志清志止啓」と祭文を結ぶが、その記述の後半部分に、

冀金輪聖皇天地地久武運繁昌萬民豊樂殊^ニ亦信心之氏士壽命長遠五穀成就垂^テ七難即滅七福即生之慈^ヲ再拜々々

という文言がみられ、そこに五穀豊穰祈願が込められていたことを知る（傍点一奥野）。

秋の収穫を直前にひかえ、あるいは収穫直後の儀式としては、さきの結鎮祭が予祝を思わせる一五穀成就を願う農耕直前の儀礼である一と対比して、予祝儀礼一般の概念からすると異和感を呈するかのごとくみられる。だが、祭文に端適に示されているごとく「五穀成就」の祈りが息づき、かつ「七難即滅七福即生」の願いが「釋藥地觀文之五佛」（釈迦・薬師・地藏・観音・文珠の如来および菩薩を指す）に向けられていたといえよう。

しかし、この祭文から呪術的要素を見出すことはできない。さきの二つの祭文とは異なる点であり、農耕直前における神事での奏上祭文と内容的に異なるものであるとするには問題があるが、農耕直前と直後における神事の時期的差異は現実存在するところに糸口がやはりあるのではなかろうか。

一方、呪術的要素を見出しえない外山の祭文に対して、さきの北阪手と鹿路の祭文には「邪惡」または「邪惡魔」の除去方法として弓を射り、その際の呪文として「唵阿九提ソワカ」「唵業那提ソハカ」などとともに「急々如律令」の文言があった。それは「惡神惡鬼」に対する呪文である。そして、「五穀成就」に対しては「五黄帝並二天王豎牢地神」への助力を求めたのであった（北阪手）。また「牛頭天王」以下「八萬四千五十四神等」

の勧請を促して五穀成就を願ったのである（鹿路）。

そこには、いずれも共通する「鬼」（それも〈惡鬼〉〈害鬼〉の鬼を意味する）の存在を知る。そして、「如占形」く、宝劔をもつて害を除くという（鹿路）。

このように祭文の文言を検討すると呪いの要素と占いの要素が表裏一体として存在することが、予祝儀礼としての祭文（北阪手・鹿路）をみるかぎり窺えるようである。いいかえるなら、同じ予祝儀礼の神事に呪いと占いが、農村落の中で息づいているといえる。それは農耕を生計の基調とする農民にとって大きな関心事であったことを端適に表現しているといえなくはない。

結びに

祭文から呪術的要素（呪文）を提示する段階で、粥占等から引き出された年占とがいずれも共通する基調（農耕における予祝儀礼）をもつ点から〈呪文〉・〈占い〉が表裏一体のものではないかと大雑把に考えた結果導きだした大胆な素描である。だが、農村に息づき底辺に流れる文化的要素の一片を理解できればと考えたからほかならない。



▲華鎮祭の祭文（その1）



▲華鎮祭文（その2）

ザル製作技術

大宮守人

山添村岩屋は、昔し100戸のうち、90戸はザルづくりをしていたが、今日では全てやめてしまった。また、三ヶ谷ではザルの小売りを多くしていた。

中峰山では昔は3軒あったが、今日では、平田氏を残すのみとなった。平田氏は、岩屋から平田家へ養子に来た父に習った。

1、材料

ハチク、マダケ、モウソダケを材料とする事が出来るが、ハチクが最も多く使われる。マダケは使いにくく、モウソダケは肉厚のため部分的(棒のみ)にしか使えない。

竹は、12月から2月いっぱいまで(寒切)に出材したものを竹屋から買う。竹屋は山から道まで(車の入る所)出すが、そこからの運搬は買う方が持つ。

竹は2~3年生のものが使いやすい。昔しは真竹も多数あったがジネンコ(花が咲いて枯れる事)で今は停滞している。

仕入れた材は生竹の間に割り、実と皮をはなし、すぐ使える状態で保存すると持が良い。

2、竹材の単位

目の高さ(株から約一間)の周囲の長さ(口径)で測る。

1束は1尺(カネ尺)のものでは1本	
9寸	2本
8寸	3本
7寸	4本
6寸	5~6本
5寸	8~10本

5分上がり段階が変り、9寸5分~1尺5分までを1尺、8寸5分から9寸5分までを9寸等々とする。

2~3年生のものでは6寸程度の太さである。

3、割りの工程

- (1) 先端部の5~7尺程を切り落とす(口径5~6寸の竹)。
- (2) カンナ(刃口の周辺が竹の径に沿って内丸になっているにて各節の凸部を削る。
- (3) 割包丁にて、十文字に割りを入れ、カシの本を二つ組んで作ったクモを挟んで、株元まで割とおし、四つ割とする。
- (4) 四つ割にしたものをさらに3本に割る。
6寸程の材では、48本に仕上げる。
未と株の幅を一定にするため、コジ割にする。
- (5) ザルづくりには皮ばかりを使うため、実と皮をはなし(2~3ミリ厚)、実はタキシバにする。
- (6) さらに皮を割包丁にて四つ割にする。
- (7) 細長いヒゴ(ホオ)の裏を専用のカンナで削る。カ

シナ台の中央に溝を開け、竹ヒゴを溝に入れて持ち、ヒゴの一方を誰かにひっぱってもらう。

- (8) タツベ(ヒゴを通す縦材)を作る。

1斗5升入りのイッカケの場合、長いもの13本、短いものを2本(両端)を1コ分とする。

- (9) 台の(棒)の芯材を作る。1斗5升用で5尺1寸5分。器の大きさにより5寸ずつ段かきがあり、外側の化粧マワシより1寸短くする。

- (10) 化粧マワシ

モウソダケを使う。中アテは薄く、外アテは少し厚く作り、(9)を芯材として巻く材料とする。

口の上部に廻す竹は、皮を上にし、割包丁で割りを8つ入れ、中央で止める。

4 編みの工程

- (1) 口の芯材を輪にし、針金で止める。
- (2) 輪にした芯材の直径に対し、ホオを8回(口輪1パイ半の長さ)まわし、8本に切る。芯材の一方にそれぞれ2つ折しタツベ(短)を1本挟んで編む。
- (3) さらにタツベを14本(全部)入れ、編んで、ザルの中央部とする
- (4) 中央の左右を交互に編む。この間、真中にホオ1本にて、張りを渡し、形を固定する。尚、一端から編みはじめたホオは、他の一端で、目の間に狭み込む。
- (5) 編み終ると、一方へタツベを引き絞る。他方は、イッカケの口となる。
- (6) 引き絞った方を編み上げ、輪の内側にぐらせて、口輪部で折り返し編目に入れて止める。
- (7) 内側の化粧マワシと口輪の間にハリコミを1本入れ、内と外、上側をあてて針金を通し、巻き止める。針金の寸法は器の直径の4倍半を用意し、12ヶ所に通してしめ上げる。
- (8) 余分の竹をノコで切り取る。

ザル屋の仕事には、フシ取り用カンナ、ホオ削り用カンナ、割包丁、砥石の他は、ほとんど、手先の仕事ばかりで、道具いらずであるという。それだけに、記録には、ビデオ等による収録手段が是非必要と思われ、より致密な記録になるよう努力したい。



▲タツベを一方に引き絞る工程

大和のオコナイ

浦西 勉

～竹材からザルづくりまで～

大和の「オコナイ」行事—奈良市中ノ川の場合—

村落にて、正月、二月に「オコナイ」という行事がある。多くは僧侶が導師になり、村人が参加し、村のお寺や神社の脇の神宮寺で行なわれている。今回の特別テーマ展「寺院と年中行事」に関して、若干の調査を行ったが、それによる報告をすることにする。

奈良市中ノ川の「オコナイ」行事の例である。行事は2月18日であるが、当屋の五人の内で当屋頭とうやがしらの人が前口餅を作る。餅は観音さんの前に供える六重の餅と、三社神社の角の餅を作る。さて18日の12時ごろから奈良市鳴川の徳融寺（融通念仏宗）の僧侶が導師になって、中ノ川区保管の「十一面悔過」の経典ののっとなって行なう。以前は歓喜天の僧侶が来ていたが、今は壇那寺の徳融寺から来ている。行事は写真のごとく座して始められる。行事の途中「乱声」というところがあり、それを聞くとネコヤナギの木を板に打ちつけ、法螺具・太鼓などで驚かされる。約30分程で行事が終わり、あとは雑談ですごす。今日ではこの行事は形だけになっているきらいがある。しかし次のように古老の伝承（註①）がある。①宮座の下から15名をへやといい、この人達が乱声の時に堂の中であばれまわった。②またネコヤナギの木に牛玉宝印とすった和紙をはさみ、村の軒数だけを作る。これはモミマキの時に水口に立てる。③子供がエンタタキといって乱声の時ネコヤナギの枝で、堂の外縁を叩き回った。④袴をつけて堂の中で行った。これらの伝承から以前はかなり盛大に行ったと思われる。この行事に使用されている用具として、牛玉版木・朱印・鉄鉢・経典・法螺具・太鼓などがあり、すべて村神主（宮座の1人）が保管している。このうち経典は「十一面悔過」と記されており、末尾に「半時天文：戊未歳霜月二十有五日自今以後枝見之人礼、写一遍廻向」とあり元文4年に写されたことがわかる。

また「享保二壬戌年霜月八日 和添彦上郡中川邑 観音寺什物」と記されているところから享保2年に中ノ川区の所蔵となったのである。牛玉版木や朱印などは江戸時代のものと思うが年代不明である。

ところでこの「オコナイ」を調査してみると、牛玉版木と朱印などがよく保管されているのである。たとえば天理市下山田の薬師堂にある牛玉版木は「文化十三年大工奥傳五郎キシシ 下山田村 薬師寺 重持」と記されたり、また榛原町長峰では「承應二年」と刻まれたりしている。また都和村吐山浄福寺垣内では「慶安五年、薬師・正月八日」と刻られた朱印などがある。これらの「オコナイ」行事に利用される用具で特にその年号が記されている点注目にあたいすると思う。今後わずかでも行事に使用される用具に年号のあるものを大切にしていゆかねばならないであろう。

註① 池之畑伊平氏（明治37年生れ）、杉田谷夫氏（大正4年生れ）両氏から聞く。



▲中ノ川のオコナイ

★★★★ おしらせ ★★★★★

●民俗博物館の行事予定

12月23日 常設展（新規企画コーナー）

「生業を支えた職人」展オープン

☆上記の常設展展示替のため12月13日より

12月22日まで臨時休館いたします。

12月23日 体験学習講座〈シメナワづくり〉

55 1月27日 体験学習講座〈タコづくり〉

2月24日 体験学習講座〈竹トンボづくり〉

3月9日 民俗講座〈講演二題〉

3月23日 体験学習講座〈オテダマづくり〉

《表紙解説》 農耕を営む年間のサイクルの内、農家にとって予祝儀礼として五穀豊穡を願う一つの神まつりである弓射ち行事が行なわれてきた。奈良県下でも正月から二月にかけて行なわれたこの行事もほとんど姿を消しつつあるが、ケチン、ケイチン（結鎮祭）として親しまれてきたものである。

■編集後記■

晩秋の陽が公園に照りはえる今日、もう間近く「冬將軍、がやって来る」という感覚が杳元からのびよる。すべての自然の生きものがその活動を停止しはじめる冬へ。公園とともに歩みつづけた博物館も民家も溶け込みはじめつつある。そして、厳しい冬の寒気の中で一輪の花が春を待ち望むように体内に新しい息吹きを蓄える光景を眼前に迎え生気を甦えらせることを願う。それが公園であり、博物館であり、民家であろう。 (3)